



報告



向島学会

2006年度 第4回 交流のサロン



向島学会 2006年度 第4回交流のサロン



2007年

3月24日号

ニュースレター

<http://www.mukojima.org/>



Association of Mukojima Studies

発行 向島学会
代表 高木新太郎

131-0032
東京都墨田区東向島三丁目4番2号
03-3610-1378 (TEL・FAX)

仲間になりませんか!

向島学会では、会の目的に賛同し、活動に主体的に参加するとともに、活動の成果を会に提供する個人を対象に会員を募っています。交流サロンなどに参加していただき、その後、会員に申し込まれることをお勧めします。

2006年度の向島学会交流のサロン第4回目が開催されました。今回は「外」からのゲストの方に、向島という場所性に深く関わって実現した事業プロジェクトについてお話しいただきました。加えて、修士論文を通じて地域を独自の視点で捉えた研究の発表がありました。

日時：平成19年3月24日(土)午後2時～5時 開場1時30分
会場：寺島集会所 東向島1-23-10 (鳩の街通り商店街、寺島保育園裏手)

プログラム
ご挨拶 高木会長 (2:05～2:10)

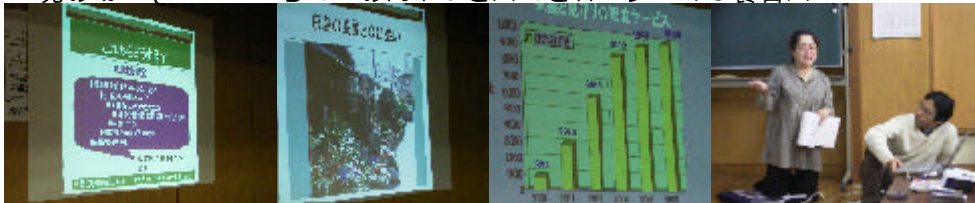
- 1部：ゲスト講演 (2:10～3:00)
 - (1)「長屋を利用した高齢者ケアについて～特養ホームはなみずきホームの取り組み」 永井都也子さん
 - (2)「劇団唐ゼミ・業平公演テンマツ記」 中野敦之さん
- 2部：学生による研究発表 (3:10～3:40)
 - (1)「地域とアートプロジェクトの関係」 小川泰史さん(立教大学大学院)
 - (2)「小学校を媒介とした地域活動におけるパートナーシップ形成とその継続に関する研究」 菅原由依子さん(東京工業大学大学院)
- 3部：事業報告 (3:40～4:30)
 - (1)新タワーシンポジウムについて
 - (2)向島アート・まち大学について
 - (3)空き家プロジェクト
 - (4)向島マッピングプロジェクト
 - (5)向島アートアーカイブプロジェクト
- 4部：地域関連イベント (4:35～4:55)
 - (1)「向島芸術計画2007」(AAF企画) 他 懇親会：
時間：5時30分～
会場：東武曳舟駅 居酒屋「源次郎」

1部：ゲスト講演

「はなみずき」は八広3丁目にあり、入居者52名とデイサービスや相談窓口などの通い50名ほどを擁する特別養護老人ホームです。年間1万食にもなる配食サービスなど、地域に出ていくような需要も高まっています。先頃、京島地域に長屋を借りてデイケアセンターのサテライト、逆デイサービスなどの場を設けて活動しています。高齢者ケアはベッドでなく畳でという思いとともに、実際に認知症が進むと帰宅できなくなり、長屋で生活できるためにという目的を持って、この事業が始まりました。実際におこなってみると、木と紙、畳といった長屋の空間力が高齢者の生活力・生命力を高めているとのこと。さらに、この場での障害児と高齢者との交流を仕掛ける、施設では相手の存在を見えなかった子供たちが高齢者と仲良くなり、障害児側で他者認識も高まっています。長屋は「まちづくりセンター」を通じて耐震改修も施されました。長屋だからできることを追求したいということでした。

地域の高齢者介護問題は切実で、会場からも長屋を使ったケアホームなどの提案には大きな関心と期待をもった発言がありました。

「長屋を利用した高齢者ケアについて」
特養ホームはなみずきホームの取り組み
永井都也子さん



No.03/06

NPO法人向島学会ニュースレター

劇団唐ゼミは、横浜国大で教鞭を執っていた唐十郎の元で育った人たちが十郎の退官に際して「唐座」としてデビューした劇団です。東京でテント公演の場所を探していたときに墨田区役所の人（向島学会メンバー）を知り合いの押上駅と業平橋駅の間の「新東京タワー」建設予定地の存在と東武鉄道への紹介を受けて、2006年に2度の公演を実現させました。「お化け煙突物語」と「ユニコーン物語」です。テントの特質と鉄道操車場という場所性をうまく生かしての演出がなされました。最後の場面でテント幕を持ち開けるという最終列車が駅に到着し、暗々と光る車窓が暗闇にゆつくりと動いていきます。「お化け煙突物語」では3日間で400人強の観客が集まりました。これからは墨田での公演を視野に入れて、まずは地元との交流から、とのことでした。

会場からは、「新東京タワー」を機にいろいろな人が地域に入ってくるなかで、地元地域としても積極的にいかつ規律を持って迎えることの大切さが語られました。



地域とアートプロジェクトの関係

小川泰史さん（立教大学大学院）

社会学の目で見た「アートプロジェクトの役割」を、1980年代から2001年までのプロジェクトを題材に総合的なまちへの関わりという面からとらえた研究です。京島・向島を対象として、アートプロジェクトに関連する地域情報を収集し年表をつくって歴史の軌跡にたどり着くこと、アート関係者や建築都市計画関係者、そして地元住民にヒヤリングしてその時々キーパーソンを抜き出して、まちづくりにおけるアートおよびアートプロジェクトの意義を評価します。アートの社会的意味と認知度の低さという現実場面でのスレをきつかけに、アートと人と人との出会いをまちづくりへの波及力からみよつというものです。防災まちづくりとして始まった京島向島では、その過程でアートを通じて文化的要素が入ってきました。国際デザインワークショップにおいて、都市建築サイドから更新プロセスにおけるアートの重要性が指摘され共有されるところに、アートがまちづくりにつながりました。向島博

2部:学生による研究発表



小学校を媒介とした地域活動におけるパートナーシップ形成とその継続に関する研究 菅原由依子さん（東京工業大学大学院）

以前に第三寺島小学校での壁画プロジェクトに参加した菅原さんは、プロジェクトの中心にいた教員が別の学校に転任したことから、教員の移動がまちづくりにどう関わってくるのかというテーマを見出しました。事例として、墨田区2004年「子供壁画プロジェクト」市川市2001-03年「まちづくり学習」ほか一つを検討しています。向島では保護者が学校に話を持ちかけ実行委員会を形成し、そこに教員が参加しています。一方、市川では学校長とまちづくり委員会会長が発表し、教員に委託されています。プロジェクト実施後は、希薄化不透明化という問題を抱える地域と学校との関係に変化がみられました。しかし、参加と慣れ、責任と信頼といった意識には立場の違いが反映されています。事後意見では、プラス面として人脈の拡大や世代間交流、マイノリティ面として結果の不明やスタート時に先の見通しが立たない不安などが上げられています。教員の転任によって経験はどう次に生かすのかという課題が生まれます。そこではいろいろな分野が関わっていることが記憶を残すことにつながるということや、スタッフ、時間、年齢といったキーワードが抜き出されました。「慣れる」として、とくに伝統に慣れることと新しい活動に慣れることの違いを知って意識的に取り組むことの重要性が指摘されました。向島では記録を残すなどの努力が少なく、経験が個人レベルで止まってしまう。地域を巻き込むことへの意識が、下町だからか、低いという点も指摘されました。会場からは、地域にとつて学校活動の継続は課題だが、継続は地域にしかできないという意見が出ました。



覧会では向島住民の参加がみられ、アートロジックへ。アートプロジェクトを準備する「組織」から地域への関心を持つ「個人」が生まれ、キーパーソンは組織から個人へ展開し、共有する意識も展覧していきます。アートプロジェクトが次の「人」をつくるという「循環」が生み出されています。そこに新しい活動や維持、更新を生むという、アートプロジェクトがまちづくりに果たす役割があるという結論が語られました。



空き家プロジェクト【岡田、長谷川、遠藤、山本、大崎】



新タワーシンポジウムについて【山本、友野】



向島アートアーカイブプロジェクト【トリのマーク、田中】

3部:事業報告

4部:地域関連イベント

向島アート・まち大学について【曾我、真野】



「向島芸術計画2007」(AAF企画)【曾我】



向島アートアーカイブプロジェクト【トリのマーク、田中】



向島マッピングプロジェクト【原口】

